古代東アジアにおける宮殿の系譜*

── 高句麗と渤海を中心に ──

ヤン・ジョンソク
（翻訳：篠原啓方）

The Genesis of Palaces in Ancient East Asia

Koguryeo and Bohai

YANG Jeong-Seok

東アジアにおける古代都城制の中でも、宮殿は中国の影響を強く受けてきたと言えるが、各地域によって新たにつくられる要素も存在する。その要素は宮殿が新たに造営されるたびに登場し、各地域の内部における独自の変遷も見られる。本稿では、このような認識に基づき、高句麗や渤海を中心に、東アジア宮殿の系譜を検討したい。

高句麗の国内城は、造営過程において、当時流行していた魏の宮殿に類似した宮殿が、宮殿の中央を基準に造営される配置構造を維持するいっぽう、宮殿の中央建築群の地表面を他のそれより高くするという、中国漢代の前殿と高台建築のアイディアも確認される。こうした特徴は、高句麗の平壌遷都（427）後にも維持されるが、安鶴宮においては、自然の地形を利用し、中央建築群が周辺より高い場所に配されている。

また安鶴宮には、魏晋南北朝期に流行した太極殿と東西堂制という宮殿の新たな配置構造が受容された。安鶴宮の中央建築群は、南宮、中宮、北宮に大別されるが、このうち南宮は中央に太極殿を、その左右に東堂と西堂を配置するという構造が採用されている。これにより南宮は、後方の中宮や北宮よりはるかに広い空間を持つようになった。さらに安鶴宮には、後方に行くにつれ空間全体が狭まっていくという配置構造が見られる。

安鶴宮のこうした特徴は、渤海上京城の宮殿においても確認されている。ただ上京城の宮殿は完全な平坦地に造営されたため、中央建築群の地表面を高める構造や、後方に行くにつれ地表面を高くする配置構造を持たなかった。また上京城においては、東西堂制が採用されなかった。これは隋唐代の宮殿が東西堂の造営を必要としない構

---

* 本稿は、筆者がこれまで韓国で発表した論考を、今回のシンポジウムの趣旨に合わせる形でまとめたものである。
梁正錫「安鶴宮の南宮正殿廊の構造からみた高句麗の都城制」（『高句麗の国際関係』、高句麗研究財団、2005）
梁正錫「宮闕遺跡からみた渤海の都城」（『渤海５京と領域変遷』、東北亜歴史財団、2007）
梁正錫「高句麗安鶴宮の中央建築群に対する考察 ── 前殿高台建築の形制の採用を中心に ──」（『中国史研究』56、中国史学会、2008）
梁正錫「渤海の宮闕構造の系譜に対する検討 ── 上京城と西古城の宮殿址を中心に ──」（『歴史と談論』56、2010）

造に変化したためと思われる。にもかかわらず、上京城の第１号宮殿と第２号宮殿には、安鶴宮南宮の太極殿（正殿）、中宮の太極殿（正殿）の建築構造がそのまま採用されている。特に第２号宮殿は、高句麗の独特の建築構造を持つもので、中国においては類例を探すのが困難である。

このように渤海は、高句麗の宮殿構造の中から系譜的に重要と思われる要素が採用しつつ、いっぽうで隋唐宮殿の新たな要素をも採用している。このような変化を経つつ、古代東アジアにおける宮殿の建築構造と配置様式は、発展を遂げていったのである。

キーワード：都城制、正殿、高台建築、国内城、安鶴宮、上京城

1　はじめに

古代東アジア諸国は、それぞれの地理的・歴史的環境を基盤とし、政治・経済・社会・文化において相互に影響を受けつつ発展してきた。東アジア諸国は、中国との関係が定立されて以降、中国的な色彩を持たない部分を見出すのが困難であるほどに、多くの影響を受けていた。古代建築もまたそうした様相が見出されるが、特に瓦と基壇遺構とに大別される考古資料において、中国の影響が一つの画期となることは明らかである。だがそうした様相は、中国から影響を受けはしたものの、まったく同じ姿であらわれることはないように思われる。喩えるなら、電気が電線を通じ伝わる際、その電力量が途中で抵抗を受けて当初と同じ量では伝わらず、途中で特定の装置によって増幅や変造されるようなものである。またこうした過程を通じ、当初とはまったく異なるものが登場することもある。

古代東アジアの都城制における宮殿もまた、そうした例である。中国から伝播したものの一部の要素はそのままに、それ以外の要素は各地域の状況によって新たに変容する。また中国においても時間と共に新たな要素が取り込まれ、それらの一部はさらに東アジア諸国へと伝わっていく。こうした流れは、当時の東アジア諸国の変化の過程を理解する上で、非常に重要な糸口となろう。

本稿では、こうした認識に基づき、高句麗と渤海を中心とする東アジア宮殿の系譜について検討してみたい。影響関係を中心に見ると、その時期は大きく３段階に区別される。高句麗の国内城期には、従来の宮殿構造に対し、前殿と高台建築というアイデアが新たに採用され、高句麗の安鶴宮期には新たに魏晋南北朝の太極殿と東西堂制が採用され、渤海の上京城期には、新たに登場した隋唐代の宮殿様式に影響されつつ、高句麗伝統の宮殿配置構造が継承・発展されていった。これは、魏晋南北朝と高句麗の影響を受けた新羅王京、そして新羅王京の影響を受けた日本の藤原京という、従来からの筆者の認識と軌を一にするものである。本稿が東アジア都城制の変遷を体系的に理解する契機となれば幸いである。

2　高句麗の国内城宮殿の系譜に関する検討

１）高句麗国内城宮殿の配置構造

『三国史記』などの文献史料によると、高句麗の都城には、卒本（遼寧省桓仁）から国内（吉林省集

安)、国内から平壌、そして最後に平壌から長安城という三度の遷都が確認される。

国内城は、瑠璃王22（A.D.3）年、卒本から国内への遷都の後、長寿王12（427）年に平壌へと遷都するまでの420余年間、高句麗史上最も長い都城であった。国内城は通溝盆地の平原上に位置する平城で、現在は損壊が進んでおり、形態と規模の正確な推定は困難だが、過去の調査成果に基づくと次のように整理できる。国内城の平面プランは方形で、1984年の調査では、東壁554.7m、西壁は664.6m、南壁は751.5m、北壁は715.2m、城壁の周は2686m であったが、2003年の再調査により、北壁730m、西壁702m とさらに長いことが確認された。

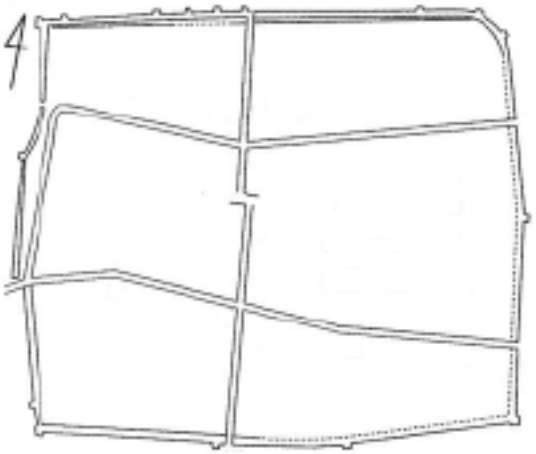


図２－１　国内城平面図
（吉林省文物考古研究所・集安市博物館『国内城』）

国内城内部の空間構成を知るには、建物址の調査発掘が最も重要な基礎資料となるが、現在城内には多くの建物が立ち並んでおり本格的な調査は不可能だという。これまで建設工事の過程で高句麗時期の建物址が数基見つかっている。これらのうち重要なものは、60～70年代に調査された三つである。

まず1963年に大衆浴場の建設工事の際に見つかった建物址からは「太寧四年…」銘が刻まれた瓦当が出土した。1971年には、運動場の西において東西２列の礎石列と建物基壇、軒瓦、石塀の基礎などが見つかり、1975年には集安県庁舎の工事現場において古代の塀の基礎と赤色の瓦片が大量に出土した。

これら三カ所の建物のうち、最初の建物址の前面には、東西方向に二列並んだ大きな礎石群があり、その長さはおよそ240m あった。損壊がひどく正確な規模と平面構造は不明であるが、南側の最初の建物址から北に向かって徐々に高くなる台地の南北線上に、三つの大きな宮殿建築群があった。建物址からは基礎施設が検出され、深さ約1.5m、礎石は直系60～80cm で円形または八角形の柱座を持つ二重柱座であるものが多い。

このほかにも多くの建物址が見つかっているが、これらはおおよそ城の中央部と北部に集中している。

北朝鮮のハン・インホは、国内城内部で見つかった建築群のうち、前述の60～70年代に調査された三カ所に注目した。彼はこれらについて、前の建物址の前面で確認された240m の建物址を、宮殿南の回廊址と推定している。そして国内城内部の調査発掘の結果に基づき、城内の宮殿建築物には秩序があり、雄壮に建設されていたとした。宮殿はほぼ正方形の城壁に囲まれ、南北の中心軸上に三つの大建築群、すなわち南宮、中宮、北宮が配され、それらを媒介する建築群は回廊によって囲まれていたものと推定したのである。また建物址にある礎石の規模と軒瓦から、国内城が都であったころの宮殿はたいへん雄壮かつ華麗であったと考えた。

図２－２　国内城の宮殿配置図（概念図）

彼はさらに、平壌にある安鶴宮が位置選定や建物の配置、規模において国内城とある程度共通点を持つと考えた。北の大きな山を背景に、前に川を抱いていること、宮城の平面がほぼ正方形であること、宮城内部の南北中心軸に三つの中心建築群が配されていることなどは、国内城と安鶴宮の宮殿が同じ手法で建設されたことを示す、というのである。

こうした認識は方学鳳にも見られる。彼は宮殿の配置の検討を通じ、高句麗の国内城と安鶴宮の宮殿建築のうち、中心となる建物は城の南北中枢線上に位置しており、南から北に一列に配されたと考えた。これは、国内城が内部に小さな宮殿を有する単なる平城ではなく、安鶴宮とほぼ同規模かつ類似の形態を有する宮殿であったことを述べたものである。

こうした国内城のあり方を考える上で想起されるのが『三国史記』巻17、高句麗本紀５烽上王７（297）年の「宮室の増営が余りに贅沢で華やかであった」とする記事であり、これは国内城の王宮が雄壮かつ華麗であったことを伝えている。また同書の高句麗本紀６、故国原王12（342）年には「丸都城を補修し、国内城を築いた」とする記事は、この時に初めて国内城を築いたのではなく、増修築だと理解することもできる。

国内城の初築がいつであったかを正確に知りえる資料は、今のところ存在しない。国内城は、初期においては土城であり、後に石城に改築されたとの発掘成果を根拠に、漢代郡県の城を再利用したものだとする考え方もあるが、とりあえず瑠璃王22年（A.D.3）に国都を卒本地域から国内地域に移した際、内部に基礎的な宮殿建築を造営した可能性は考慮できよう。そして宮殿の増築が297年に一度行われ、427年に平壌に遷都する前となる342年に、宮殿を含んでいたかは不明であるが国内城の増建がなされたことが、史料から確認される。

だとすれば、こうした特徴を持つ国内城の宮殿構造は、何に由来するのかを考える必要があろう。高句麗は当時、中国と密接な文化交流を行っており、その交流の中心に高句麗の都（宮殿）があったのは明らかである。従って安鶴宮と国内城の宮殿に見られるこうした特徴を究明するためには、その類例が当時の中国に存在していたのかを比較する必要があろう。

現在までに知られているもので、国内城の造営もしくは増建時期に最も近接した時期の宮殿は曹魏（220-265）の鄴城であり、文献と現地調査を基に、おおよその復元図がつくられている。その後、後趙（319~351）が鄴城に造営した都については、文献に基づいた復元は現時点では困難である。曹魏の鄴城は、正殿が聴政殿と文昌殿という二区域に分かれ、並んで存在している。これは比較的後代の日本の平城宮の前期宮殿が、大極殿と大安殿という二区域に分かれているのと似ているが、前述した国内城のそれとは異なる。いっぽう時期的には差があるが類似の構造を持つのが、前漢の正殿として用いられた未央宮の前殿である。次章ではこれを中心に検討してみたい。

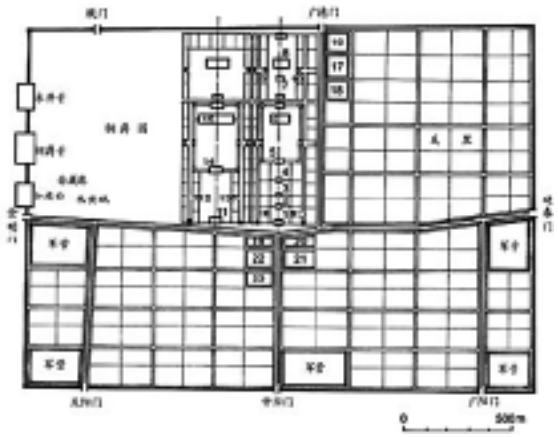


図２－３　曹魏鄴城の平面復原図

2）漢未央宮前殿との比較

未央宮は漢長安城の西南部にあり、高祖７（B.C.200）年に築造が始まり同９年に完成した。長安城の他の宮とは異なり、未央宮は基本的に新築であり、漢長安城の西南部において最も高い場所に位置している。

未央宮は1961～1962年にかけて考古学的な基礎調査が行われ、1980～1989年には中国社会科学院考古研究所を中心とする全面的な調査・発掘が行われた。未央宮は都城の皇宮であり、方形に近い平面プランを持ち、四方は宮墻で囲まれている。一辺の長は約2150～2250mで、全周は8800mに達し、面積は５㎢となる。これは漢長安城の７分の１にあたる面積である。

未央宮の全体的な追加調査はその後も行われたが、前殿の調査は未だ行われていない。これまでの探針調査と試掘調査を通じ、確認された遺跡の現況を整理すると、次の通りである。

前殿は未央宮の正殿であり、宮城中央部に位置しているが、前殿の立地は周辺より高めの自然丘陵で、南北長350m、東西幅200mである。『三輔黄図』には、未央前殿が竜首原上にある丘陵だと記されている。このように竜首山の自然地形を利用したことについては、膨大な工程が費やされる人工の基礎造成作業を省略した新たな技法と認識し、まず地形に合わせて前殿を築造し、大殿の築造にかかる莫大な土築作業を省略したとする見方もある。

一方、この前殿の台地には、もう一つ独特の特徴が存在する。遺址全体が、南から北に向かって徐々に高くなっている点である。

遺址は南北方向の３段構造で造成されており、大台の北部の最も高い場所は、現在の地表面より15m高い。そして南北に配された各段には、それぞれ大形宮殿が１基造成されており、各宮殿の南面部は広場の形態をなしている。長安宮内の他の遺跡の地表面とつながる前殿大台の底部面積は、南北400m、東西200mで、３層に分かれた地表面の高低差は大きく、現在、２層台が１層台に比べ3.30m高く、３層台の最後の部分は２層台より8.10m高い。

まず最下段にあたる南部の宮殿址は、大台の南端から50m離れており、東西長79m、南北幅44mである。建物址の北面には、１基の出入門があり、門道の幅は約６mである。宮殿址の西側には、柄形をした別の建物址と繋がっており、宮殿址の付属建物と推定されている。

中部の宮殿址は、南部の宮殿址から94m離れており、東西長121m、南北幅72mで、西北部は南北方向の廊道・慢道とつながっている。また南部と中部の宮殿址の間には、東西長134m、幅12～15mの廊に似た性格の建物址がある。

北部の宮殿址は、中部宮殿址から北に32m離れた場所にあり、東西長118m、南北幅47mである。北部宮殿址は、南面部が直線形であるのに対し、北面部は凹凸形をなしている。北部宮殿址の北には、別の後閣がある。

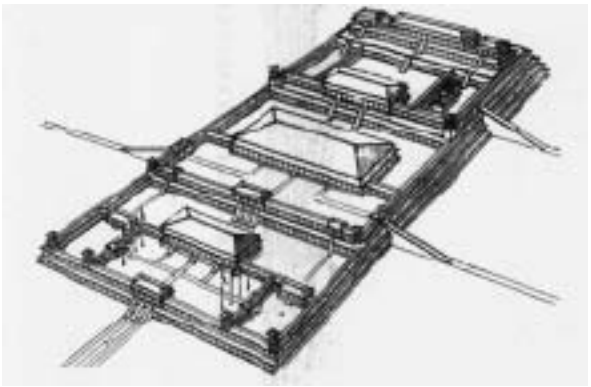


図２－４　漢未央宮の前殿復元図
（楊鴻勛『宮殿考古通論』）

このように３段からなる台地上に造営された南・

中・北の敷地面積は、それぞれ2680㎡，8280㎡、4230㎡であり、これは秦の新朝宮の前殿である「阿房」台榭建築群の主殿には、萬人を座らせることができるという内容を想起させる。前殿は、このように全体的にみて南から北へと続く三つの台面に分かれており、次第に高くなっていくのである。

ところで、こうした様相は、規模や高さの差があるものの、基本的には前述の高句麗国内城の宮殿部分と類似している。従って現存資料のみでは断言しかねるが、少なくとも国内城の宮殿増築区域には、一種の高台というべきものが採用されていたと考えても問題なさそうである。こうした様相は、平壌前期の宮殿として知られている安鶴宮の中央建築群にも確認される。これについて、次章でさらに検討してみたい。

3　高句麗安鶴宮の系譜

1）安鶴宮中央建築群における高台建築型制の採用

2006年に行われた安鶴宮宮殿遺跡の調査により、南門址と南宮第１号宮殿の回廊に囲まれた台地との水平差は３ｍ～3.4mあり、南門から南宮第１宮殿址のレベル差は、4.5mであることが分かった。いっぽう南宮回廊内はゆるやかな傾斜をなしつつ中宮の前面回廊に至るが、これを通じて回廊内部は、ある程度の整地作業が行われていたことが分かった。従来の研究においても、こうした立地に造成された安鶴宮の中心軸の高さの変化に対し、基本宮殿がある中心部は、宮城の南門から北に行くにつれて高くなり、南門址と最も北にある建物址との高低差は12.2mに達することから、建築群の平面逓減法と結びつけて理解してきた。

全体的には、後方に行くにつれ地表面は高くなり、建物の高さは低くなり、幅は狭くなる、といった様相をなすが、これは錯視現象を利用し、建築物全体を実際より大きく、奥行きを深く見せるための技法だと説明された。こうした特徴は、実際にこの地が後方に行くほど高くならざるを得ない地形でもあり、そうした地形を活用する過程で起こったものである可能性も排除できない。だがこれと類似の特徴が、安鶴宮に移る直前の宮殿であった純粋な意味の平城、国内城においても確認されている。

中宮とつながる南宮の第２号宮殿の回廊のうち、東回廊の先端からは門址が検出された。門址のある場所からは城壁の東門がすぐ見下ろせ、門址は凹んだ低い地形上にあり、門の外には、城内東の低い地表面が存在する。構造は前面３間、側面２間と簡素である。前面３間のうち、中央は５ｍ、左右は４ｍ

図３－１　安鶴宮南宮２号宮殿　東回廊先端の東門址の全景
（東門址（東宮址）より）

で、前幅13mをなす。門は低地から高地へと上る途上に位置しているため、構造的にも他の門とは異なっていたものと考えられる。このように、東宮址は、南宮、中宮、北宮址の中心軸より16～20m低く、東宮址内では北よりも南が低い。

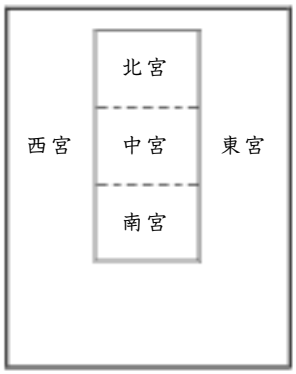


図3－2　安鶴宮宮殿の配置概念図

安鶴宮には、南宮、中宮、北宮のほかにも、東宮と西宮が存在する。この東宮と西宮は単に東西という平面構造の差のみではなく、建築群のある地表面のレベルにも顕著な差が見られ、これは安鶴宮の特徴と言えよう。最も多くの宮殿建築が造営される地表面は平坦をなすのが一般的であるが、この宮殿はやや異なる様相を呈している。

中央の南宮、中宮、北宮はおおむね定型構造をなしているのに対し、前述した東宮と同様、西宮も多くの面でこれらとは異なっている。西宮は北宮西の広い空間にあり、数棟の建物からなるが、その立地は中央の本宮の地表面より低く、特に西の城壁に近い所が非常に低いという。

安鶴宮をめぐるこれまでの議論は、後方へ行くにつれ規模が逓減することの意味と、渤海上京竜泉府の宮殿につながる系譜に関するものがほとんどであった。これについては次章で触れることとし、ここでは上京竜泉府の宮殿建築との違いに注目したい。上京城の宮殿とは違い、安鶴宮中心部の地表面は、左右の東宮と西宮のそれよりも高く、南から北へと段（台地）をなしつつ、建築群の立地が次第に高くなる。あたかも安鶴宮内部にある高台のような、独立した形態をなしているのである。これは、安鶴宮が国内城に採用された未央宮の前殿のような古代の型制を、依然として固守していることを意味する。また安鶴宮の中央建築群は、未央宮の前殿建築と同様、後方に行くほど高くなる三つの区域に区分されるという共通点も見られる。

未央宮建築は、その「壮麗」さを以て皇帝の「重威」を体現し、歴代皇帝はいずれも未央宮を皇宮としたという。文献史料によると、皇帝登基、頒布詔書、天子結婚、接受朝謁、寿誕慶賀、皇帝入殯といった重大な行事は、ほとんどこの未央宮の前殿で挙行され、皇帝の日常の政務もまた前殿で行われたという。

未央宮前殿の宮室の名称について、楊鴻勛は前述した礼式をすべて前殿つまり未央宮の最前面にある殿で挙行したとする。すなわち三殿遺址から前面の南部の台地にある殿堂は、大朝所用の前殿本身であ

図3－3　高句麗安鶴宮中央建築群の復元モデル

り、これらの総称としての「未央宮」の匾額は、この殿の上に懸かっていたと推定した。

そして日朝や常朝は、中間体量が最大となる殿堂の中、つまり路寝の名で呼ばれたであろう中殿において、常朝が行われたものと推定した。また北部の殿堂である後殿を宣室殿と解釈し、皇帝の退朝後の生活起居がここで営まれたものと考えた。このように楊鴻勛は、未央宮正殿内部の建物の名称について、南部を前殿に、中部の宮殿を路寝に、北部の宮殿を宣室と後閣と考えたのである。

いっぽう未央宮の前殿は、大台そのものを一種の前朝後寝の群体として理解し、台榭式宮殿の最前面にある南部１層台の殿を前殿に、中部２層台の殿と路寝に、北部３層台の殿を宣室と後閣とする見方もある。

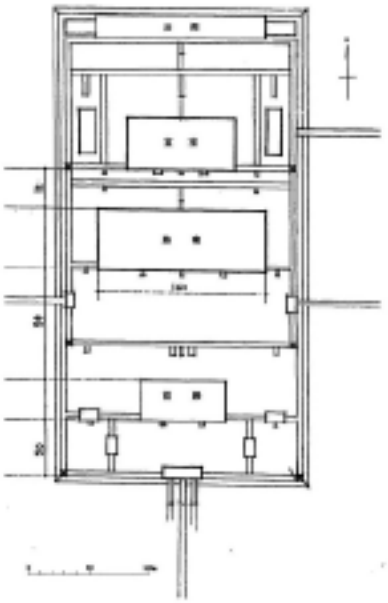


図３－４　漢未央宮正殿の平面図
（楊鴻勛『宮殿考古通論』）

前述のように、安鶴宮の特徴である中央建築群（南宮、中宮、北宮）は、未央宮前殿に似た構造をなしている。安鶴宮は、南門と４ｍの高低差がある場所から南宮が始まり、その背後にある中宮と北宮が段をなして高くなるが、この中央建築群を中心に、東西が傾斜をなして低くなる点は、基本的な枠組みにおいて未央宮の前殿と同じである。またこうした特徴は、安鶴宮に移る前の宮殿であった国内城においても確認されるという。

２）安鶴宮南宮における、魏晋南北朝期の東西堂制の採用

いっぽう安鶴宮は、もう一つの特徴を持っていた。安鶴宮は、国内城の造営に際して受容された漢未央宮前殿のような古代建築型制を基に、新たに魏晋南北朝期の宮殿に採用された太極殿と東西堂制を採用したのである。

安鶴宮の宮殿建築は、いずれも南宮第１号宮殿を中心とする同心円上に配されており、南宮は安鶴宮宮殿における中心だと言うことができる。南宮は、南壁の東方城門と西方城門を結ぶ線の南の中央にあり、中央の大きな正殿と、東西が対称をなす小宮殿の三つで構成されている。南宮は、他の区域に比べて建物が基本的に高く、内部には第１号宮殿と２号・３号宮殿の間に格の差をつけ、左右に並んで配されていることが分かる。この南宮に第１号宮殿と、これを中心に左右に配された２号・３号宮殿の構造上の特徴は、次の通りである。

図３－５　安鶴宮中央建築群の配置図
（下が南宮区域）

まず南宮の１号宮殿址は、前面57.1m、側面27.3m の長方形をなし、前面11間（49m）、側面４間（16.3m）の単一建物である。規模からすると、南宮第１号宮殿は安鶴宮の建築物の中で最も雄壮であっ

たと言えよう。

これに対し南宮第２号宮殿は、１号宮殿の東に50m離れた場所にあり、南宮第１号宮殿を中心に、左右対称に造成されていた。宮殿址は前面34m、側面18.5m、元体（基本建物）の規模は前面７間（28.5m）、側面４間（12.4m）である。この建物の両側には、一段低い翼廊が正面４間（12.6m）、側面２間（５m）で造成されている。３号宮殿もまた中心をなす１号宮殿から西に50m離れた場所にあり、２号宮殿と対称をなしている。宮殿址は、前面33m、側面19m、建物は前面７間（28.5m）、側面４間（12.4m）である。２号宮殿と同様、両側に翼廊が前面22m、側面５mの規模で造成されている。

南宮の性格については、南宮前面の全長が280m、回廊の全長が205mと、雄壮さを強調した非常に大規模の建築群であり、国家的な儀式や対外関係の行事といった公式行事に使用されたものと推測された。

この安鶴宮の最前部に位置する南宮の第１号宮殿は、従来の都城制研究において太極殿と呼ばれてきた正殿の規模でもある。ただ南宮については、第１号宮殿だけではなく、左右に50mの間隔を置いて造成された第２号・第３号宮殿も存在する点を念頭に置かねばならない。これは、第１号宮殿を中心に、第２号と第３号が左右から補佐する形態の宮殿配置とも言えるためである。このような配置構造は、国内城段階には見られない。

中国においては、前述のように漢未央宮のような形態の宮殿建築物は、時間の経過に共に消滅する。その後は、太極殿という新たな宮殿建築様式が導入されるためである。ところで、魏晋南北朝期の宮殿制度に特徴的なのは、太極殿だけではない。太極殿を補佐する左右の建物、すなわち東西堂制が採用されて初めて、魏晋南北朝期の太極殿の一廓が完成するのである。中国の建築史研究者である劉敦楨は、三国時代の魏文帝が鄴から洛陽に遷都する際、大朝である太極殿とともに東西堂を造成して以来、魏晋南北朝期にも東西堂の造成が続けられたとする。その構造的な特徴は、宮殿の最も中枢部にあたる太極殿の左右に、東西堂が南向きに並ぶというものだが、東西堂は規模において太極殿とは格差を付けられていたと考えられる。さらに隋唐以前つまり魏晋南北朝期において、東西堂の造成が続けられたという。

太極殿と東西堂制が最初に成立した魏・西晋代には、東堂は朝見・聴政の場として、西堂は皇帝の生

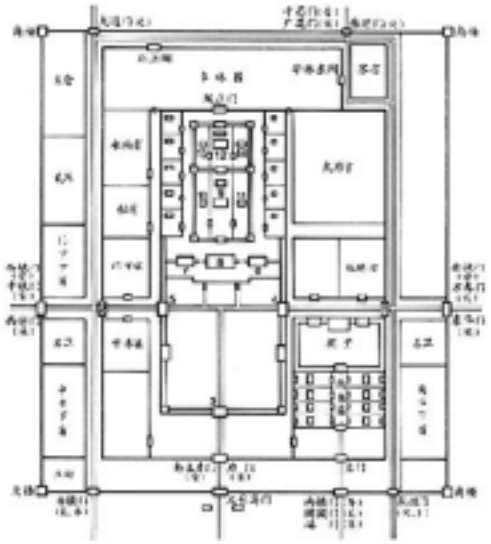


図３－６　東晋南朝（建康）の太極宮の推定平面図

図３－７　北魏洛陽太極宮の推定平面図

活空間として区分されていたという。その基本プランは、建康に遷都した東晋においても受け継がれたが、劉宋代に入って大きく変化したという。すなわち西堂においても定期的な聴政が行われ、皇帝の住まう殿舎は別途に造営されたというのである。これに伴い、東西堂の居住機能は完全に廃棄されて儀式・聴政の場へと変質し、南朝へと受け継がれたと考えられた。

北朝においては北魏孝文帝の漢化政策の一環として、漢人の宮殿の基本型式である太極殿と東西堂制を導入し、そこから東魏と北斉へと受け継がれたという。北朝における東西堂の役割も南朝と似たものであっただろう。このように魏・晋・南北朝期の東西堂は、太極殿の左右において、日常の政務をはじめ様々な行事を行う補助的役割を果たしていたことが分かる。

前述の安鶴宮においては、臣下の業務空間としての外朝も、朝堂に代表される建物址も確認するのは困難である。従ってこれを外朝と言えるかどうかについては、定かではない。ただ安鶴宮の最前部に位置する南宮の第１号宮殿が、比較の対象がないほど巨大であったことのみが分かっている。これは、既存の都城制研究において太極殿と呼ばれる正殿の規模でもある。また南宮には、第１号宮殿だけではなく、左右に50m 離れて造成された第２号と第３号宮殿が存在する。これは、第１号宮殿を中心に、左右において第２号と第３号が補佐する配置とも言えよう。

こうした安鶴宮の南宮区域は、魏晋南北朝期の宮殿制の影響を受け、新たに採択された太極宮区域であり、第１号宮殿を正殿の太極殿、第２号宮殿を東堂、そして第３号宮殿を西堂として理解することができる。つまり安鶴宮の築造当時には、隋唐代以降の都城制においては廃棄された東西堂制が採用されているのであり、いわゆる５～７世紀（魏晋南北朝期）の宮殿配置制度の採用が確認できるのである。

4　渤海上京城宮殿の系譜

最近発刊された上京城の発掘調査報告書（2009）は、日本が戦前（1930年代）に行った発掘調査に端を発する渤海都城に関する考古学的基礎資料の整理が一段落したことをうかがわせる。同報告書の発刊は、渤海研究の中心軸ともいうべき韓国においても、大きな関心を集めた。上京城の研究が、報告書の発刊を以て終わるのではなく、むしろ始まったばかりであることを確認する契機になったという点においてである。

報告書で明らかにされた渤海の都城、中でも宮殿の系譜に関する認識は、既存の研究と比較・検討する必要がある。報告書では、基本的に発掘調査の成果に基づき、上京城の１、２号宮殿と３、４号宮殿の系譜を分け、３、４号宮殿は渤海の宮殿に対する認識の下で造営された初期のものであり、１、２号宮殿は唐の影響を受けて拡大したものだとしつつ、唐の影響を受け

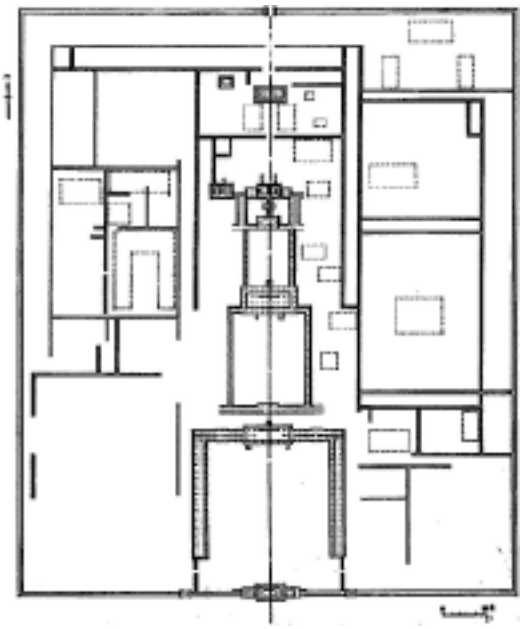


図４－１　渤海上京城宮殿

る際、宮殿の規模や宮城のあり方には、位階に伴う調整がなされたとする。これは渤海都城の変遷過程に対する中国学界の認識が妥当であったことを、考古学的な成果に基づいて論証したものだと言えよう。近年は韓国においてもこれらの成果を基に、上京城を理解する研究も出てきている。

だとすると、上京城宮城の全体構造は、唐の影響を受けて変化する過程において造営されたことになり、西古城は単に初期上京城の原形としてのみ捉えられることになる。だが東アジア都城制における宮殿構造の系譜が持つ象徴性を考えると、こうした見方には再検討が必要だと思われる。

1）唐長安城宮殿との比較における認識の問題

上京竜泉府は、755年～785年の30年間と、794年から遼の侵略によって滅亡するまでの132年間を合わせた162年もの間、渤海の政治・経済・文化の中心であった。上京竜泉府は、８～９世紀において、唐の都長安に次ぐアジア最大級の都市の一つであり、当時の北東アジアでは最大を誇った。

唐は618年、高祖李淵によって建国され、滅亡を迎えた哀帝21年までの290年間、存続した。唐は21代を経る間、都を長安に定め、全国を統治した。長安城は、隋の大興城として建築家の宇文愷が設計した。開皇２年に施工が始まり、永徽５年（654）に郊外城が完工するまで、50余年もの歳月をかけて建設された。このような長安城の建築配置構造が、上京城の造営時、多くの点で反映していることは、考えてみれば当然のことである。このような姿は、中国において比較的遠く離れ、政治的な影響が疎遠であった日本の平城京からも用意に見出すことができる。

ところが長安城のどの部分を上京城に活用したのかについては、中国の研究者の間でも、意見が一致していないようである。

まず李殿福は、上京城の宮殿を唐長安城の太極宮に似ていると考えた。太極宮の正殿は承天門の北方に位置する太極殿で、一般的に中国の伝統的宮殿制度である三朝制の「中朝」と理解されている。ならば、太極殿の北にある両儀殿は「内朝」、宮殿の中心となる南門である承天門は「外朝」ということになろう。また彼は、このような長安城太極宮の中の太極殿に当たるものとして、上京竜泉府宮城の第１号殿址を挙げ、これが宮中の正殿であり、渤海王の「中朝」の所在地だとする。このように考えると、上京宮の第２号殿址は、太極宮の両儀殿に相当する渤海国王の「内朝」の所在地となり、上京宮の正門である五鳳楼は、唐太極宮の昇天門にあたる渤海国王の「外朝」となる。

図４－２　隋唐長安城太極宮の推定平面図

これとは別に、上京城の宮殿と比較されるもう一つの宮が、大明宮である。上京城の研究においては、比較的古くから大明宮の含元殿が引きあいに出されてきた。魏存成は、大明宮の各宮殿を上京城の各宮殿と一対一で対応させている。彼は、中区宮殿址にある第１宮殿の左右に配された曲尺形の回廊が、位置や走向からみて、唐長安城の大明宮にある含元殿の主殿と、左右前方の翔鸞閣と棲鳳閣の間の廊道に相当すると考えた。ただ上京城の場合、含元殿とその前の布局を簡略化し、含元殿の左右廊と東西朝堂

を一つにし、翔鸞閣と棲鳳閣のような建物を省略したという。さらに第２殿は、位置や規模から見て、大明宮の宣政殿に相当すると考えた。また第３殿と４殿は唐大明宮の紫宸殿に相当し、３殿は紫宸殿の前殿、４殿は後殿のようなものだと考えた。最後に、第５殿址は、北門にある点から、史料に見られる唐大明宮玄武門の玄武殿のようなものだとした。

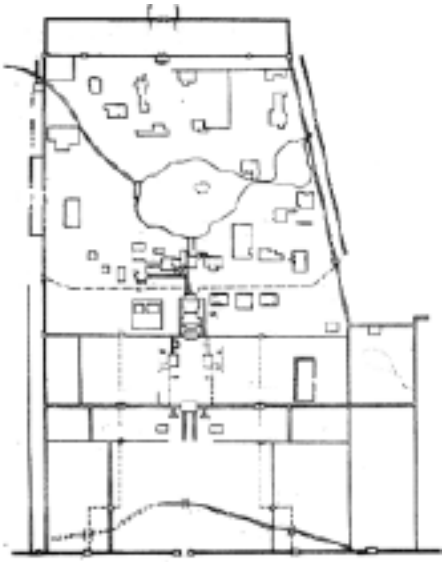


図４－３　唐長安城大明宮の平面図

だが、このような長安城との関係からみた中国の上京城の研究には、比較の方法における問題点が露見する。

いっぽうこれに対する代案もあった。朱国忱は、宮殿配置の布局（形態）を中心に理解し、渤海の上京城が唐長安城の太極宮とは異なり、大明宮とも一定の差があることを認め、太極宮の影響と、大明宮の影響を区分することで理解しようとした。彼は多くの相違にもかかわらず、上京宮城は長安宮城から強い影響を受けたとし、宮殿の基本配置は太極宮に従い、型制の一部の変形を、大明宮の含元殿の例によって説明しようとしたのである。特に第１号宮殿には、含元殿の影響が強く見られるとしている。

張鉄寧は別の方法から復元を試みている。彼は主に戦前の『東京城』報告書に基づき、柱の配置において営造法式の分類法を適用し、第２宮殿が第１宮殿より格が高いとした。また屋根については、柱の配置や建物の重要性、規模などを基に、第２宮殿を上京城で最も格式ある重層の寄せ棟屋根で復元した。第１宮殿と第３宮殿は第２宮殿に次ぐ格であるとみなし、単層の寄せ棟屋根に復元した。さらに宮殿区域の南北城壁の四隅を対角線で結んだ交差地点が、第２宮殿の位置と一致することから、これを第１宮殿より重要な建物と解釈した。規模も75.9m と大きく、唐の含元殿の上層基壇との類似点を挙げ、含元殿を参考に復元した。宮殿の基壇は、現存高が2.9m であり、第１宮殿の基壇の高さが2.7m である点を参考にし、これより高い3.23m と推定した。

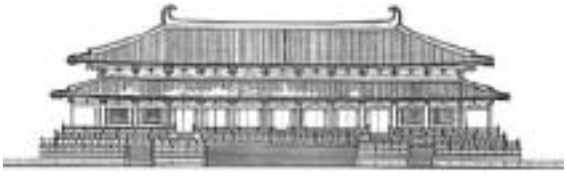


図４－４　唐　大明宮含元殿の復元図

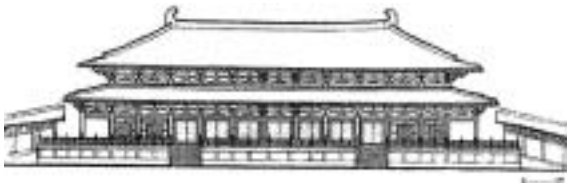


図４－５　上京城第２宮殿の立面図

彼はまた第１宮殿が、第２宮殿より小さい原因について、渤海は当時、唐の冊封を受けていたため、唐の大明宮や太極宮とは異なり、唐をはじめとする外国使臣を接見した第１宮殿は、内朝大殿の第２宮殿より小規模にならざるを得なかったとした。

このように、研究者によって唐大明宮の含元殿と比較する場合も、第１宮殿と第２宮殿の比定が異なっている。いずれにせよ、こうした考え方は、唐の影響を受けたとする点で共通しているものの、影響

を受けた点を具体的に述べるのは困難であることが分かる。影響を受けない独自様式の可能性や、全く系譜の異なる建築様式であった可能性もあるのである。そこで注目されるのが、高句麗の宮殿である安鶴宮である。

2）安鶴宮との比較からみた上京城宮殿の系譜

渤海の上京龍泉府の宮殿構造との類似点について、唐の都城と共に多く挙げられるのが高句麗の都城である安鶴宮である。1973年に発刊された『大成山の高句麗遺跡』において既に「渤海の都である上京竜泉府の皇城遺跡は、安鶴宮址の建築術をそのまま継承し、開城の満月台の高麗王宮址にも安鶴宮の建築術に多く倣っていることが分かる」とし、その継承関係を論じている。

上京竜泉府の宮城内は、5つの宮殿址が、中心軸線上におおよそ対称に配置されている。このうち1・2・3宮殿址は、いずれも回廊で囲まれているが、1宮殿から3宮殿に進むにつれ次第に狭くなっており、高句麗安鶴宮との類似点が注目されてきた。

安鶴宮の宮殿配置が8世紀の渤海上京城に近いとし、これを本格的に論じたのは千田剛道である。彼もまた、上京竜泉府の宮城と周囲の配置が、安鶴宮の構成と基本的に類似している点を挙げている。さらに安鶴宮の建物のうち最大規模であり、最も中心にあって重要な建物と考えられる南宮第1号宮殿の東西両側にある土間（長さ24m）に注目した。この土間には、建物の痕跡が見つかっていないが、上京竜泉府の宮城の中心的な建物の両側にある「土階」に類似していると考えた。

実際、渤海上京城の第1号宮殿は、高句麗安鶴宮の南宮第1号宮殿と様々な点で類似している。まず上京城第1宮殿と安鶴宮第1号宮殿は、それぞれ東西56m、南北24.24m、東西57.1m、南北27.3mの長方形をなしており、平面において類似していることが分かる。建築の外形を左右する礎石の数もまた、正面11間×側面4間と同じである。宮殿が配置構造に占める位置も、ほぼ同じである。また左右の翼廊によって東西の回廊とつながっている点も同じであり、両者の翼廊が、基壇の高層化に伴う若干の差が見られるに過ぎない。このように、安鶴宮と上京城の第1号宮殿における根本的な違いとは、東西堂の有無と、基壇の高低のみだと言えよう。そしてこれは、高句麗の安鶴宮と上京城の時期差と、それによって生じた渤海支配層の権威建築に対する認識の変化を象徴すると考えられる。このような構造を持つ建物を、前章で見た「太極殿形正殿」と言うことができる。

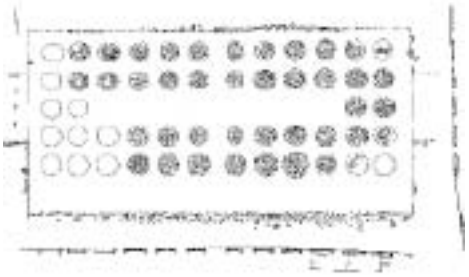


図4－6　安鶴宮南宮第1号宮殿址

図4－7　上京城第1号宮殿址

いっぽう、前章で述べた第2号宮殿址と含元殿との関係についても、所見を述べておく必要があろう。この説は、第2号宮殿址の前面の長さが80mと第1号宮殿址を凌駕しているため、75.9mである含元殿

の上層基壇との類似点に注目したものである。そして宮殿の基壇も現存高が2.9mであり、第１宮殿の基壇高が2.7mである点を参考にし、これより高い3.23mと推定している。こうした論理に基づき、第１宮殿が第２宮殿より小さかったとするのである。

だが上京城第２号宮殿址の再発掘調査により、従来80mとされてきた正面は93.5mであることが確認され、逆に側面は従来の30mから22.4mと小さかったことが分かった。また基壇高も３m以上から2.16mに修正された。つまり正面の長さを除けば、側面の長さや基壇高は決して第１宮殿より格が高いとは言えない。

こうしたなか、第２号宮殿址に関する最終報告では、正面19間、側面４間の巨大な建物に復元し、単一建物としては最も壮大なものだとし、復元案が出された。ところが報告書では、これとは別の復元案を出している。これによると、上京城第２号宮殿は、単一建築ではなく、複合建築であった可能性が高いと思われる。

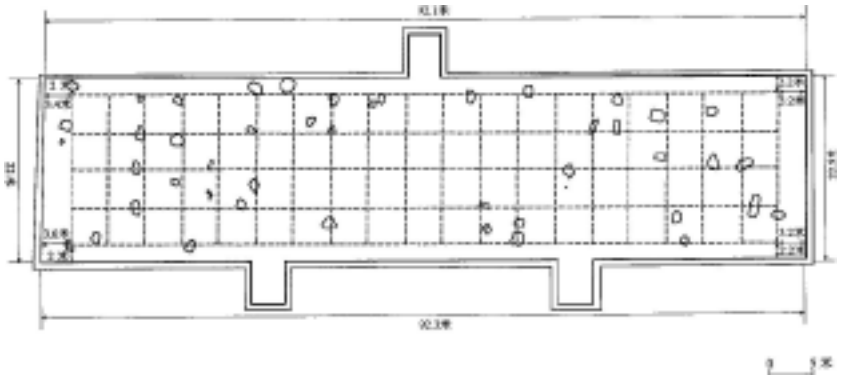


図４－８　上京城第２号宮殿址の平面復元１案

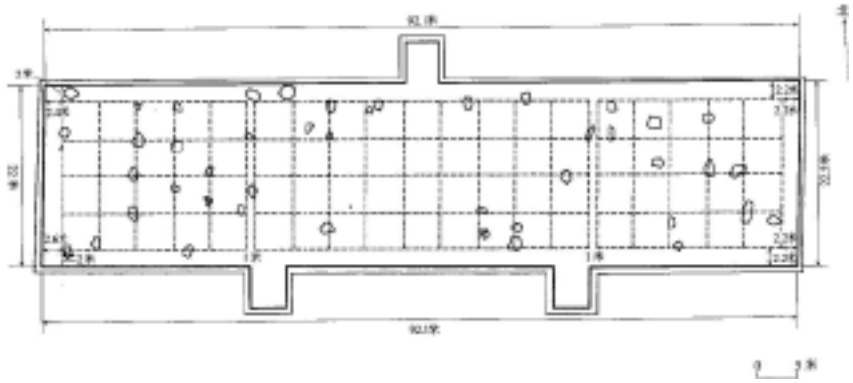


図４－９　上京城第２号宮殿址の平面復元２案

復元案は、中心建物を正面９間、左右の配殿をそれぞれ正面５間としている。この案による限り、上京城の第２号宮殿は、宮殿配置において類似点を持つ高句麗安鶴宮中宮第１号宮殿と、建物の構造においても非常に似ていることになる。

安鶴宮中宮に造営された第１号宮殿址については、位置から見て中宮の中心建物だと考えられ、同時

に安鶴宮全体の建築構成においても中心だと言うことができる。報告によれば、建物の規模は最大であり、平面構造も他の宮殿にはない特徴を持つという。

安鶴宮中宮第１号宮殿址は、地表面を30cmほど高く整地して建てられている。宮殿址の周囲には石を積み上げて崩壊を防ぎ、その上には花こう岩を加工して踏み石として敷き詰めたものと思われる。

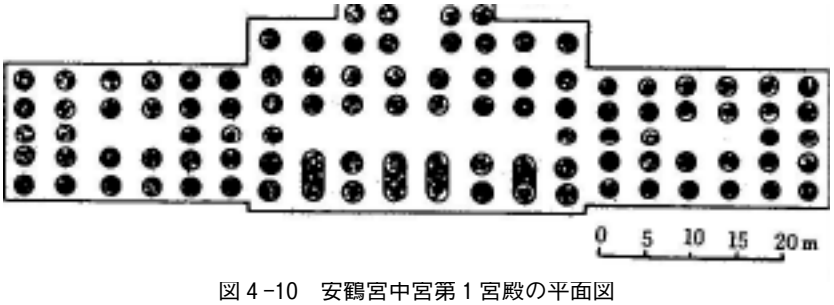


図４-10　安鶴宮中宮第１宮殿の平面図

宮殿址は平面のみから見ると、正面長90.5m、側面幅33mで、前面に20、側面に５の柱を配した19間の建物となる。ところが詳しくみると、この建物は、中央部に中心となる建物があり、その両側に配殿を持つという、安鶴宮独特のものである。これらのうち、中心建物は規模が前面32m、側面16.6m、構造は前面７間、側面５間で、両側の配殿はいずれも前面５間、側面４間である。こうした特徴は客舎型の建物にも見られる。つまり若干の相違はあるものの、安鶴宮第１宮殿は、上京城の報告書が示した復元新案と非常に似た構造を持つことが分かるのである。

以上のように、上京城の１号宮殿と共に、２号宮殿もまた安鶴宮の宮殿と同じ平面構造を持っていた

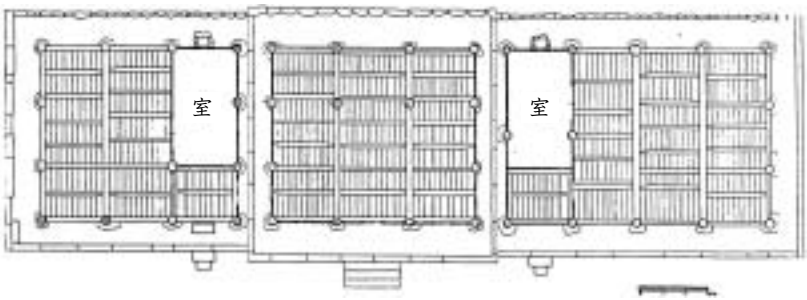


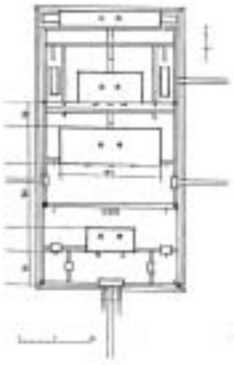
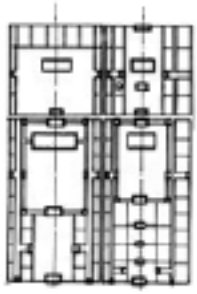
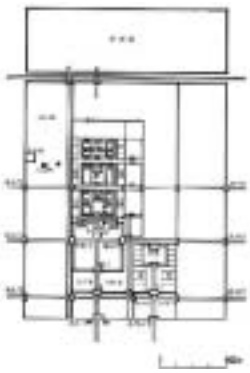
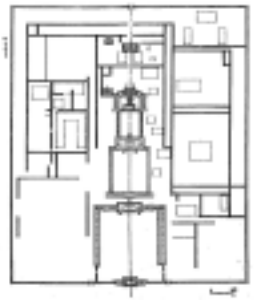
図４-11　文義客舎の平面図（復元）

図４-12　客舎型の建物（現代）

ことが分かる。これは、従来指摘されてきた配置構造の類似性と加え、個々の宮殿建築にも類似性が認められることを意味する。

このように、上京城宮殿と安鶴宮はいずれも最も前面に太極殿形態の建築物が造営され、次の空間に朝鮮時代の客舎型建物と類似の構造を持つ建物が造営されていたのである。

このように考えると「上京城の１号宮殿と２号宮殿が、上京城の１次造営の後、唐の宮殿制度の影響を受けてさらに造営された」とする報告書の指摘にも問題が出てこよう。現時点の考古学的調査から確認できるのは、上京城宮殿の第１号・第２号宮殿址の系譜は、大明宮を含む中国唐代の宮殿建築よりも、安鶴宮に認められる、という点である。

<table>
<tr><th colspan="3">東アジアにおける宮殿の系譜</th></tr>
<tr><td> 
漢・未央宮正殿
（-195-7）</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">
</td></tr>
<tr><td> 
曹魏・鄴城宮殿
（220-265）</td></tr>
<tr><td>
東晋～南朝・建康城太極宮
（317-419）</td><td> 
北魏・洛陽城太極宮
（494-534）</td><td>
高句麗・安鶴宮
（427-567）</td></tr>
<tr><td>
隋唐・長安城太極宮
（584-907）</td><td>
唐・長安城大明宮
（662-887）</td><td> 
渤海・上京城宮殿
（755-926）</td></tr>
</table>